



# 栗野頼之祐と「北摂郷土史学運動」 : もうひとつの戦後歴史学

藪田, 貫

---

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 10:72-86

(Issue Date)

2018-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81011226>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011226>



## 栗野頼之祐と「北摂郷土史学運動」——もうひとつの戦後歴史学——

藪田 貫

はじめに——戦後歴史学に関する証言——

雑誌『日本史研究』が、戦後歴史学を積極的に取り上げている。平成二二年（二〇一〇）六月号から始まった「戦後歴史学の著作を読む」はその一つだが、昭和二〇年（一九四五）一月に創立された日本史研究会自身が、戦後歴史学の潮流を担ったことから、創設とその後の活動に関わった人々を相手に聞き取りをする「日本史研究会の歩みと今後の課題」というシリーズでも戦後歴史学が語られている。前者には、若い世代を含め、戦後歴史学を再確認しようという意欲が見られるが、後者の証言には、戦後歴史学の生誕事情が語られており、それを直接、見聞していないわたしたちにも教えられることが多い。しかも、その証言を残している方々が相次いで亡くなっていることか

ら、ある種の「遺言」となって、わたしたちに語り掛ける。

つい最近、恩師である脇田修先生（生年一九三一～没年二〇一八、以下西暦のみ示す）の追悼文を書いた（『日本史研究』六七〇号、二〇一八年六月）ことから、とくにそれを感じるが、少し先に急逝された安丸良夫氏（一九三四～二〇一六年）の遺稿集として編まれた『戦後歴史学という体験』（岩波書店、二〇一六）を紐解いても、同種の感慨を持つ。彼らが第二次世界大戦後、新制大学の一学究として、戦後歴史学の構築という作業に参画した折、何が前提であったかが語られており、わたしの関心を強く引く。安丸氏は「戦後日本の歴史学は、緊張にみちた論争的な知として出発した。そこでは、戦争体験への反省と未来への希望とが結びついていて、今にして思えば不思議なほどに、知的な若者に人気のある学問だった」と要約するが、その「知的な若者」として、安丸氏や脇田氏がいたのである。

その安丸氏が、戦後歴史学の傑作として挙げるのが石母田正(二九二〜八六)の『中世的世界の形成』(伊藤書店、のち岩波文庫、一九八五)である。終戦前夜の昭和一九年(二九四四)一〇月に書き上げられたということから、正確には戦前・戦中の作品であるが、戦後の二一年六月に出版され、戦後歴史学の劈頭を飾ることとなった。

それに対して脇田氏は、太閤検地論争で名を馳せた安良城盛昭(一九二七〜九三)と豪農研究の藤田五郎(一九一五〜五二)の名を上げて、「このふたつでね、やっぱり随分大きく変わったと思います」と語っている(『日本史研究』六一七、二〇一四)。挙げられている氏名は異なるが、それを超えて共通する前提があることから、「戦後歴史学」として一括できるのだと思われる。かつて吉田晶氏(一九二五〜二〇一三)は、「戦後歴史学は戦後民主主義と不可分の関係にあり、三つの立脚点をもっていった」として、(1)天皇中心の歴史思想、とくに戦時中の皇国史観を根本的に批判すること、(2)それにかわる科学的な歴史学・歴史思想を創造すること、(3)成果を国民諸階層に普及すること、と要約している(『現代と歴史学』『ヒストリア』一五〇、一九九六)。

いまひとつ、こういう表現も戦後歴史学生誕の証言としてある。「本日お集まりいただいた創立期以来の先生方は、戦前・戦中にのさばっていた皇国史観に耐え忍び、そのうえ軍隊生活

を強いられた方々ですが、戦争に負けて復員後に、新しい歴史学の樹立を目指して研究活動を再開されたわけです」(『座談会 大阪歴史学会の創立と『ヒストリア』発刊のころ』『ヒストリア』一五〇、一九九六)。昭和三年(一九四八)一月に創設された大阪歴史談話会が元となって翌二四年一〇月に創立された大阪歴史学会に関する座談会での司会者小山仁示氏(一九三二〜二〇一一)の発言である。

戦前・戦中を生き、戦後、平和で民主主義的な社会の到来とともに、新生歴史学の復興に努めた人たちと、戦後、第一世代として歴史学の創造的發展に参画した人々を担い手として、戦後歴史学が生まれたことが語られている。言い換えるなら戦後歴史学は、戦前・戦中という母胎を持つて生まれたということである。

その時、昭和二一年(一九四六)六月の『中世的世界の形成』の刊行が、終戦直後の東京のことだとすれば、大阪歴史学会(大阪歴史懇話会から改称)の結成は、同二四年一〇月の大阪の出来事である。そして同二六年〜二七年の京都には、黒田俊雄氏(一九二六〜九三)が語る民科歴史部会の苦悩があった(黒田『現実のなかの歴史学』、校倉書房、一九七七)。つまり、戦後歴史学生誕の前提は共通しているが、成立事情は、決して単一ではない。その意味で、戦後歴史学の成立については、周辺の事例も視野に収めて確認する必要がある。

つぎに紹介する「北摂郷土史学運動」は、戦後歴史学の一つの貴重な事例でありながら、これまでまったく注目されることになかった。しかも戦前、アメリカでギリシア史家として活躍した日本人が、戦後、郷里で立ち上げた郷土史研究会が出发点となつて展開したという異色の経路を示している。それが、文化庁の補助を受け、平成二六年度から四カ年の計画で始まつた「川辺郡猪名川町における多田院御家人に関する調査研究」（猪名川町教育委員会と兵庫県教育委員会・兵庫県立歴史博物館・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターからなるプロジェクト）によつて発見されたのである。この運動には、「地域歴史遺産」への先駆的な取り組みが内包されている。本誌に寄稿し、批評を乞うものである。

### 一 ギリシア史家栗野頼之祐

北摂郷土史学運動とは、昭和二四年（一九四八）の初め、兵庫県川辺郡六瀬村（現猪名川町六瀬）を舞台に組織された「六瀬郷土史学会」を母胎に、現在の宝塚市・西宮市・川西市・伊丹市・尼崎市、大阪府池田市・箕面市・豊能町・能勢町など、いわゆる北摂地域を中心に展開した地域歴史文化運動である。のちにまとめられる規約によれば、「北摂における郷土史研究の為に郷土史関係の古文書、刻文、古墳その他史料の探訪、採



写真1 栗野頼之祐

録、整理あるひは一般地方史の研究、在るひは特殊課題の諸研究、文献の蒐集郷土史の編纂など」を目的としている（『北摂郷土史学新聞』一四号）。幸い、主宰者である栗野頼之祐（あわの・らいのすけ）を主筆として発刊された月刊新聞『宝塚新報』とその後継紙である『北摂郷土史学新聞』によつて、昭和二五年四月から昭和二八年四月の約三か年の活動を知ることができる。

北摂郷土史学運動を語るには、その指導者であつた栗野頼之祐（一八九六～一九七〇）の生涯から始めなければならぬ（写真1、学士院賞受賞時の栗野）。彼の年譜（『川辺郡猪名川町における多田院御家人に関する調査研究書』に所収。本稿ではそ

れをもとに略年譜を末尾に掲載）によれば、明治二十九年、兵庫  
 県川辺郡六瀬村大字島（明治二二年以降、昭和三〇年までの行  
 政単位）の平尾家に三男として生まれ、その後、母方の親戚で  
 ある栗野家の養子となったとある。平尾家は、多田院御家人の  
 由緒を伝える家の一つとして知られ、槻並の田中家・上阿古谷  
 の仁部家とともに調査の対象とした家である（この調査につい  
 ては末尾に記す）。宝塚の栗野家に養子に入った時期は不明だ  
 が、年譜に小学校は六瀬第二小学校とあるので、名門北野中学  
 校に入学するまでの幼少年期は、生家のある大字島を中心とし  
 た小世界の空気を吸っていたことと思われる。そんな想像をす  
 るのは、大字島を中心とした狭く濃密な世界から脱出するかの  
 ように、成長とともに彼が、北野中学校、東京青山学院高等  
 部、アメリカのオハイオウエスレアン大学へと、一歩でも郷里  
 から遠い世界に身を置こうとしたように見受けられるからであ  
 る。年譜には、その間に父政太郎と若い妻初子の死去という事  
 実が記されているが、それだけが彼を、郷里から遠ざけた理由  
 と考えられないと思う。むしろわたしには、草深い田舎に育ち  
 ながらも、名家の末裔として「青雲の志」を抱いていたのでは  
 ないか、と思われるが、残念ながら、それを跡づける材料を欠  
 いている。

北野中学校（現大阪府立北野高校）から青山中学高等部、そ  
 してアメリカへと新天地を求めることで栗野のちに、当時の

日本人としては珍しいギリシア史学者への道を歩むこととなっ  
 た。ドイツ人考古学者シュリーマン（一八二二〜九〇）などで  
 知られたギリシア史学である。その動機付けが日本であったの  
 か、アメリカ留学後のことかも不明だが、アメリカ生活は、大  
 正一四年（一九二五）から昭和一五年（一九四〇）まで一五年  
 の長期に及んでいる。二九歳から四四歳の青壮年期である。彼  
 の学者としての一生を決める二五年間であり、同時に、寡婦と  
 なった年老いた母かねを想い続ける二五年間でもあっただろうと  
 推測される。

この度の平尾家調査を通して、アメリカ滞在中の頼之祐から、  
 郷里の母や家族に宛てた手紙と、戦後、彼に宛てた手紙・葉書  
 が多数、見いだされることとなった（以下、「栗野頼之祐関係  
 書簡」と呼ぶ）。『宝塚新報』『北撰郷土史学新聞』と並ぶ貴重  
 な資料の発見である。その中にポストンから母（養母ではなく  
 実母）に宛てた封書がある（写真2、手紙冒頭）。便せん一二  
 枚からなる長文の手紙であるが、冒頭の部分を引用する（文字  
 遣いは原文通りだが、改行は原文通りではない。句読点を補っ  
 た。傍線は藪田による）。

母上様 侍史 ポストンにて 頼之祐 六月二十三日

その後又長らく御無沙汰致しました。御変りはありません  
 か。大層御年を召したときいて一日もじつとしてゐられぬ気

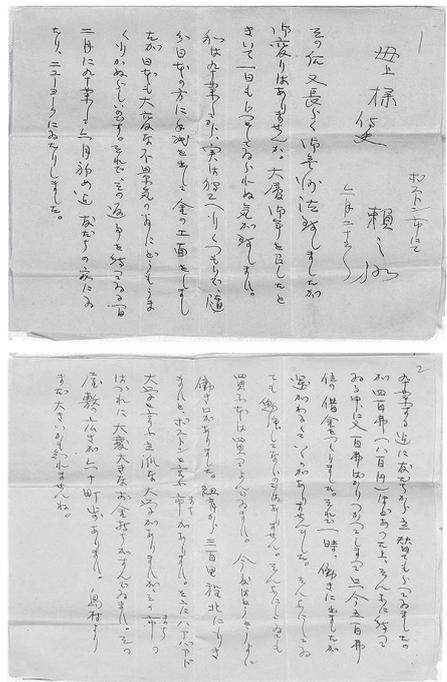


写真2 母宛の手紙

が致します。

私は卒業してから実は独乙へ行くつもりで、随分日本の方に手紙を出して金の工面をしましたが、日本も大変な不景気の為にどうもうまく行かぬらしいのです。その返事を待つてゐる間二月に卒業して六月初め友だちの家にゐたり、ニューヨークにゐたりしました。

卒業する迄に友だちから立替えてもらつてゐましたのが四百弗（八百円）ほどあつた上、そんなに待つてゐる中に又百弗ばかりつかつてしまつて只今五百弗位の借金をつくりました。それで一時、働きに出しましたが運がわるくていいのがあるありませんでした。そんなにしてゐても買ふ本はかつてよんでゐます。今度はとうとうよい働き口がありました。紐育か

ら三百里程北に行きますと、ボストンと言ふ市まちがあります。そこにハアバアド大学と言ふ立派な大学がありますが、その市まちのはづれに大変大きなお金持ちがすんでゐます。その屋敷の広さが六十町歩あります。島村よりまだ大きいかも知れませんね。

紐育（ニューヨーク）のコロンビア大学大学院を修了し、ボストンに移つた時点で書かれた手紙であることが明瞭で、年譜から発信日が昭和五年（一九三〇）六月二三日であることが分かる。当時三七歳、母かねは頼之祐を生んだ年から計算して六八歳になる。二九歳の渡米から八年、その空白は、「大層御年を召した」母の身の上を案じさせ、この手紙を書かせたのだろうと思わせる。「島村よりまだ大きい」という一節に、遠く離れたボストンに居ながら故郷を思い出している頼之祐の姿が浮ぶ。

手紙はこの後、身辺の状況を縷々語るが、便せん七枚目にはつぎのような思いを吐露する。

きつと、お母様も早く帰ればいいと御思ひでせうが、私が今、困つてゐる事は、一つは英語だけでは何にもならない事、それで独乙語とフランス語とラテン語とが私わたくしが今やつてしまひ度い勉強です。少しづつはどれも出来ませうが、このまま

では仕方がないのです。この外にギリシア語をやつて見ました。先々の学位試験もそれで通つたのですが。この外に私は本を蒐めること、——日本にはよい図書館がありませんから、自然と自分で本を持つてゐなければなりません。自分に本を持つてゐないとどうする事も出来ません。私は教へることよりも行く行くは本当は本を書き度いのです。教へることもよいのですが、本当は教へることより本を書く事が私の仕事だと思つています。本を書くとなると、人並みの本なんか書き度くないし、本を書けば私の名だけでなく家の名与(名誉)にもなりするものですから、従てお母様の名も出る。

年老いた母に将来の夢を語つてみせる頼之祐であるが、「本を書き」には傍点が振られ、決意の程を示している。「本を書けば私の名だけでなく家の名与(名誉)にもなりするものですから、従てお母様の名も出る。」という一文は、彼の背負う家の重さを示している。

頼之祐が母に「本を書きたい」と語つた本は、昭和二五年(二九五〇)、『出土史料によるギリシア史の研究』として実現する。その本は、「留学中に発表した論文を中心」にしたものだ。「栗野頼之祐先生と栗野文庫について」(『栗野文庫目録』、関西学院大学図書館、一九七四年)にあるが、翌年、日本学士院賞を授与された彼の代表作である。「家の名与(名誉)にも

なりするものですから、従てお母様の名も出る。」と記した頼之祐はすでに五四歳、母が存命であれば八五歳だが、果たして朗報を聞くことはできただろうか？

それにしても二九歳で単身、アメリカに乗り込み、英語から始まり、ドイツ語・フランス語をへて、ラテン語・ギリシア語を修得するという修行の過程は、まことに遠い道程であつたことと思う。その奮闘には、同じ歴史学者として文句なしに頭が下がる。実際、『栗野文庫目録』に収められた図書は「すべて洋書」、「そのうちには第二次世界大戦前に出版され、現在入手困難な多くの史料・文献が納められ、ギリシア・ローマ史研究上貴重なものばかりである」(『栗野文庫目録』)。「自分に本を持つてゐないとどうする事も出来ません。」と考へた頼之祐の意思が、濃紺のカバーをもつ『栗野文庫目録』(冊数一一七九点)に籠っている。

アメリカを経由してギリシア史に至るといふ研究コースが、当時、どれほどのものであつたのか、わたしには分からないが、アメリカでの長年の孤軍奮闘は、日本学士院賞の受賞という最高の形で報われることとなつた。

## 二 終戦前後の栗野の交友関係

年譜によると栗野は、昭和一五(一九四〇)年一〇月、アメ

リカから帰国する。昭和一六年一二月八日の日米開戦の一年前である。のちに触れる都留重人や武田清子・鶴見俊輔らが交換船で帰国するのは、開戦後の一七年六月以降なので、栗野の場合、帰国するには別の事情があったと思われるが、事情を詳らかにする資料を欠いている。母や妹信子宛の手紙も昭和一二年を最後に残されておらず、昭和五年（一九三〇）以降、帰国前まで在籍していたポストン美術館東洋部での様子を窺うことができない。ところが、その経歴が活きていると思わせる手掛かりが、彼によって、昭和二五（一九五〇）年四月に創刊された『宝塚新報』の中に存在する。

『新報』創刊号には「発刊の辞」と並んで、記事の下に賛助者の氏名、川西町などの役場吏員と議員、そして宝塚温泉などの広告が並び、地元の支援態勢の厚みが伺えるが、第二号に突如、大阪高麗橋に本社を置く「新東洋美術品・外国向贈答品山中商会」の名が見えるのである。一面下端のこの広告、第三号からは『宝塚新報』の表題の真下に置かれ、一三号までその位置を保つが、それは山中商会が、あたかもメインスポンサーであるかの雰囲気漂わせる。

山中商会とは、山中定次郎（一八六六―一九三六）の下で、戦前、「世界一の東洋美術商」と言われるまでに大成した古美術商である。大阪高麗橋を拠点に、明治二八年（一八九五）ニューヨークに支店を開設後、ポストン・シカゴ、さらにロン

ドンと商圏を拡大し、古美術品の収集先である北京に出張所を置くに至る。ニューヨークではロックフェラー、ポストンではフェノロサや岡倉天心、ポストン美術館などとの連携が知られ、明治三三年に合名会社山中商会となった。さらにロンドン支店は、大正八年（一九一九）、ジョージ五世からロイヤル・ワラント（英国王室御用達の証明紋章）を授与されている（桑原住雄「山中商会盛衰記」『芸術新潮』第一八巻第一号、一九六七）。三〇歳も年下の栗野が、生前、定次郎に会ったかどうかは分からないが、ポストン美術館に籍を置いた以上、山中商会と繋がりができたであろうことは想像に難くない。

加えて栗野と山中商会には、いまひとつ奇しき因縁があった。山中商会のロンドン支店を任された富田熊作（一八七二―一九五三）との因縁である。富田は山中商会のロンドン支店を任されたのち、大正一二年（一九二二）、五〇歳で独立して、ロンドンを拠点に美術商として活躍した。没後、出版された『富田翁を偲ぶ』（山中商会時代の友人山中忠司の編集、一九五九）によれば、富田は川辺郡中谷村大字上野の生まれ。なんと中谷村は六瀬村と合併し、昭和三〇年に猪名川町を形成したもう一つの村である。酒造家であった実家が、とある事故を契機に没落、「少年時代から艱難辛苦の道」を歩み、「今一度自分の手で、富田の家を再興したい」との一心で奮闘。念願叶って郷里中谷村に「富田御殿」を立て、晩年をそこで過ごしたという

(富田御殿は現在、猪名川町の施設静思館)。没年は昭和二八年(二九五三)のことで、粟野による郷土史学運動と交差する。果せるかな、『北撰郷土史学新聞』第一四号(昭和二六年八月一〇日発行)の報じる「北撰の各郷土史学会 連合会を結成す」の中に中谷郷土史学会の名が見えるばかりか、顧問に富田熊作、評議員に明治一九年生まれ弟徹三の名がある。折しも連合会結成の日には、粟野の学士院賞受賞祝賀会が開かれたとあるが、猪名川の小さな町から単身、欧米に出かけ、片やロンドンで、片やボストンで、活躍する偉人が生まれていたのである。

想像を逞しくするのはほかでもない。ボストン美術館東洋部での粟野の在籍が、ギリシア史家であった彼をして戦後、郷里で北撰郷土史学運動に邁進させる要因ではなかったかと考えるからである。この転身には、「世界の中の日本の発見」という前提が必要であるが、ボストン美術館収蔵の東洋美術・文化財に触れるなかで粟野は、そのチャンスを得たのではないだろうか。富田熊作翁には明治三九年(一九〇六)、ロンドンの山中商会から出版した英文の著書 *Japanese Treasure Tales* という作品が残されているが、粟野の場合にも、古典ギリシアから故国日本への転身が、ボストン美術館時代に用意されていたと想像する。

新たに発見された粟野頼之祐関係書簡には、同学の士であるギリシア・ローマ史研究者から頼之祐に宛てた書状や葉書が、

かなりの量、残されている。差出人は、村川堅太郎(一九〇七〜一九一)・村田教之亮(一九〇〇〜一九九)・秀村欣二(一九一二〜一九七)ら、斯界の分野では著名な学者ばかりである。来信の時期は消印などから、戦時下末期から敗戦直後に及ぶ。書簡も葉書も黄ばみ、過ぎ去った歳月を思わせるが、文面は明瞭に読むことができる。

「歴史学研究所載の御玉稿拝読致し御精緻なる研究態度何時も乍ら教へられました」「戦時をひしひしと感じ」(村田教之亮、昭和一八年一〇月一六日)や、「史学雑誌への玉稿只今確かに落手致しました。多年の御研鑽の成果を以て同誌を飾り得ますこと学界のために裨益するところ大」(村川堅太郎、昭和一七年四月一六日)といった文面には、斯界の先達である粟野への敬意が表明されているが、村田も村川も、旧制高校から東京帝国大学に進んだエリートで、当時、東京と京都の両帝国大学の西洋史講座の主任教授である。それほどの人物が、当時、神戸女学院専門学校大学の講師に過ぎない粟野に与えた表現として見たとき、在米中に粟野が、苦学の末に獲得したギリシア史家としての力量の大きさがうかがわれる。

くわえて彼らの書簡には、「重い歴史」を背負った粟野の姿が記されている。

## ① 昭和一七年一〇月一三日付、村川堅太郎の手紙

(前文略) さて一昨日は思いがけなくも非常に結構な品々を頂戴仕り御厚情の程衷心より御礼申し上げます。見るからに食欲を誘ふ品々にて恐らくは何百年の歴史を担ふ御邸内の古木に実つた品であろうと家内と語りあつた次第で御座います。所謂味覚の秋もどこへやら八百屋の店頭にては全く見かけぬ行列しても買へぬ品々を多量に頂戴致し本当に有難く思つて居ります。(以下、自宅での果樹栽培の苦勞を述べる) 松茸も本年の初物にて洵においしく頂戴致しました。柚迄御添え下され細心の御懇情学兄の論文を拝読する際を思ひ出しました。

## ② 「昭和二二年」七月八日付、秀村欣二の手紙

拝復 御芳墨御雄篇掲載の「社会経済史大系」雑誌の御返却下さいました書籍何れも有難く拝受仕りました。(略)「戦没戦士」の御玉文も深い感銘を以て拝読。(略)日本の勇士達のためにもこんな碑文が欲しいと沁々と希つて居ります。どうかこの戦没碑文集は其後の御増補の分を加へらまして御上梓の日を鶴首してゐます。

村川の手紙からは、生家である六瀬の平尾家の歴史が浮かぶが、多田院御家人の末裔であることを村川は、知っていたと思わせる。また秀村の手紙からは、栗野が、「戦没戦士」に大き

な関心を寄せていたことが伺われるが、「戦没碑文集」が上梓されたのかどうか確認できていない。それでも、栗野の身辺を、同業者たちが語つたものとして貴重である。

貴重という点では、昭和二〇年三月二十八日という日付をもつ都留重人(一九一二〜二〇〇六)からの葉書は特筆できよう。

拝啓 いつぞやはお便り有難く拝見いたしました。其後敵襲繁き折柄御地の皆々様如何かと御案じ申し上げて居ります。当方は幸ひ無事、小生ハ突然ソ聯邦へ出張致す事と相成り、今月中に東京を出発いたします。先日、池原兄来訪暫く振りでしたので色々語り合いました。貴兄や池原氏等いつまでもお若いのにもいつも感服してゐます。

「敵襲繁き」は、都留の住む東京への三月九日・一〇日の大空襲を指しており、「ソ聯邦へ出張」は、四月五日、ソ連モロトフ外相による日ソ中立条約不延長通告、小磯内閣総辞職として年表に記される日本とソ連邦との交渉を指していると思われる。当時、外務省囑託であつた都留と栗野の間には十六歳の年齢差があるが、ハーバード大学で出会つて以来の知己であつたと思われる。著名な経済学者であつた都留には『アメリカ遊学記』(一九五〇年、岩波新書)、のほか『人と旅と本』、『随想と思い出』(著作集一一卷・一二卷、一九七六、講談社)など、

往時の交流を記した著書があるが、そのいずれにも栗野は登場しない。とくに『アメリカ遊学記』は、約一年間の都留のアメリカでの修業が克明に描かれ、栗野の場合、どうであったろうかと思わせるが、証言がないのは残念である。

いずれにしても、愛息の帰国を、首を長くして待つ母の願いを無視して一六年の長期に及んだアメリカでの修業は、帰国後、帝国大学教授からの敬意を集めるとともに、後年、『出土史料によるギリシア史の研究』による日本学士院賞の受賞という榮譽をもたらしたのである。

### 三 北摂郷土史学運動の展開

さて、いよいよ本題に入るが、栗野頼之祐による北摂郷土史学運動の原点は、昭和二四年（一九四八）の初め、生家平尾家のある六瀬村を舞台に「六瀬郷土史学会」を立ち上げたことにある（『宝塚新報』第五号）。昭和二〇年八月二五日の敗戦から三年余り後のことである。政治史的には米軍の占領期として知られる時期だが、栗野頼之祐関係書簡に残された一通の葉書が、敗戦直後の文化的雰囲気を示唆する。それは当時、神戸女学院専門学校大学の同僚であった和島芳男（一九〇五〜八三）からの葉書で、日付は昭和二一年一〇月二四日。文面は、左記の通り。

拜啓、秋たけなはなる時候になりましたが、その後、御機嫌如何でいらつしやいますか、久しくお目にかかりませんが、別しておさわりもないか御案じ申して居ります。正倉院御物展観などで日本文化が再び昂揚しているときを迎へ、我々国史学徒使命の益々重大なるを思ひ勉強して居ります。相変わらず御鞭撻下さい。不一

戦後初の正倉院展については、「敗戦に打ちひしがれた人々の気持ちを奮い立たせることを目的の一つとして、その翌年に正倉院宝物の展覧会が奈良帝室博物館で開催された。この時も一四万を超える人々が正倉院宝物を観覧している」（米田雄介『正倉院と日本文化』吉川弘文館、一九九八）との解説があるが、和島は、その場に立ち会っていたのである。

「我々国史学徒使命の益々重大」と和島が言う時、栗野は「国史学徒」に入っていない。彼は、ギリシア史を専門とする西洋史学者だからである。しかし、その四年後、栗野は北摂郷土史学運動を立ち上げ、やがて「国史学徒」である和島らも、その傘下に入ることとなる。和島は『叡尊・忍性』（一九五九年）の著書で知られるが、「忍性菩薩の研究について」という記事が、『宝塚新報』から『北摂郷土史学新聞』に改称された第一〇号に見えている。

昭和二五（一九五〇）年四月五日に創刊された『宝塚新報』は、「発刊の辞」で「新興都市宝塚誕生胎動の報を聞くこと既に久しくして」と、長年の「市制促進の声」を背景にしていることを伝えたうえで、「隣接町村を一丸として一途平和文化の模範的観光都市を創建するため」と目的を謳う。たしかに明治二〇年に「宝塚」なる地名が生まれ、箕面宝塚電鉄の開通、さらに「阪急の歌劇場中心の宝塚発展策」によって都市の景観を成したという歴史的経緯を知る時、「宝塚は村である」という事実には大きな違和感を抱くだろう。その地域感情に依拠する形で、『宝塚新報』は創刊された。

一方、栗野は社長として他の役員七名（その中に多田院御家人の末裔仁部家の当主英夫もいる）とともに名を載せているが、発行所の川辺郡小浜村米谷字八坂前三六番地は、当時の彼の住所である。さらに頼龍樹の名で書いた「文化時報」や、栗野頼之祐の名による署名記事「源氏初期に於ける多田家人群像」などは、彼の執筆であることは明らかで、無署名記事も彼の手になるものが多いと推測される。その意味で社長・編集者・記者の三役を勤めているといつていい。したがって栗野色が、きわめて強い新聞である。

たしかに西宮球場で開催されたアメリカ博覧会の記事や、「新生中学校巡禮記」の連載、さらに「宝塚市建設へ前進」（第二号）の記事は、宝塚の市制促進に向けた雰囲気を与えている。しか

し、創刊号から「多田院文書」大集成、「国宝発見多田庄六瀬村」といった記事を大きく載せ、『宝塚新報』の基調とズレが明瞭である。そこには、栗野にはもうひとつ六瀬村島という足場があり、そこを拠点に、すでに「六瀬郷土史学会」を立ち上げていたという事情がある。すでに郷土史学運動はスタートしているのであるが、羊頭狗肉よろしく内部に抑え、宝塚の市制促進という名目を優先している栗野の計算があった。しかし号数を重ねるごとに、その度合いは高まり、第五号では一面が、宝塚史学会報告と六瀬村史料報告で埋められる。さらに第九号には栗野自身による「北撰郷土史学行状記」の連載が始まり、昭和二六年正月を期して、『宝塚新報』第一〇号は「北撰郷土史学新聞」と改題される（号数は継続される）。

その意味で、『宝塚新報』から『北撰郷土史学新聞』への道のりは、栗野にとつては一直線である。すでに『宝塚新報』第二号に頼龍樹の名で「郷土史教育を強化せよ」という記事が載せられている。冒頭から筆者が誰であるかを告白するこの記事には、ギリシア史から転じた新生栗野頼之祐がいる。

長い間異国を流浪してきた者が等しく夢見るものは故郷の空である。石をもて追はるるごとく出た故郷であつたが死の床に柳青める北上の岸を恋ふるのはひとり石川啄木のみではない。（略）吾々が当面している文化日本の建設には郷土愛

による地方史の研究が二重の意味に於いて重要であることを提議したい。すなはちその一は過去の日本史観の是正と共に、自己の立っている社会をより深く知るための郷土史研究の必要である。

昭和二六年正月、『宝塚新報』は『北撰郷土史学新聞』（第一〇号）と改題されるが、そこには「編集綱領」が記され、冒頭、「北撰に於ける郷土史学並びに文化に対して限りなく深い郷土愛を以て真摯な研究を続け、なお将来のより良き郷土文化の建設に貢献せんとする若人たちの一団がその発表機関として発行する新聞である」と謳う。『宝塚新報』の「発刊の辞」と比べる時、その羊頭狗肉ふりが一新され、「郷土史学運動」に純化している。早々、壮大な「北撰郷土史学叢書出版計画」を載せるなど、栗野の本領発揮の瞬間である。

しかしわたしは、「若人たちの一団」という一節に注目する。すでに五〇歳代半ばになろうとしている栗野が、この運動の担い手に「青年」を想定していることに留意したのである。なぜなら若人たちへの注目は、当時、阪神間に生まれていた新制大学との連携を予想させるからである。果せるかな、綱領の末尾には、宝塚史学会・六瀬郷土史学会・東谷郷土史学会・長尾郷土史学会などの地域の学会と並んで、広島大学魚澄惣五郎・大阪大学藤直幹・大阪学芸大学江坂長次郎・関西学院大学武藤

誠・神戸女学院大学和島芳男・神戸大学阿部真琴・関西大学横田健一らの氏名が並んでいる。くわえて藤直幹は初代、魚澄惣五郎は第二代の大阪歴史学会会長（「大阪歴史学会創立ごころの想い出」『ヒストリア』五〇、一九六八）である。創立後の大阪歴史学会と北撰郷土史学運動は、紛れもなく交差している。

「綱領」は、次のように言う。

幸いにも私どもの文化運動は今や多くの知友を得、生の息吹をうけて長い眠りから眼覚めた春野大地のごとく北撰山野の至るところに郷土史学運動が起き上がりつつある。更によるこぼしい報せは近郊諸大学に於ける斯学の権威者たちが以上のような運動の重要性を認め、今後惜しみない指導と支援を与えられるようになったことである。

「北撰山野」に広がった郷土史学運動の姿は、『北撰郷土史学新聞』第二二号に展開図として紹介されているが、大学については「関西学院大学史学会生」という記事や、「北撰郷土史学報」として、大阪大学史学会や関西大学史学会結成の記事が見られる（第一一号、昭和二六年二月）。大阪大学史学会の項には、教授藤直幹・助教授井上薫・講師有坂隆道らの名とともに、一月例会で大阪学芸大学津田秀夫氏の「大和川付替とその意義」と題した講演があつたことと報じている。そればかりか

「講師津田氏は先に古代史を専門としていられたが、最近、近世史を専門として漁業史を究められ、(略)大阪歴史学会の推進力として活躍をつづけられている」とある。また関西大学史学会の項では、「本学に史学科が誕生したのは横田健一教授、石浜純太郎教授の並々ならぬ尽力によるものである」と書くとともに、会誌『史泉』の発刊、「栗野氏の御指導下に横田教授会員が北摂郷土史料調査をおこなった」ことなどを報じている。昭和二十六年(一九五二)年頭の交である。

栗野の令名が、在野の郷土史学運動でありながら、新制大学の史学科教員との連携をもたらしたことは言うまでもないが、あわせて彼の歴史学者としての力量が、それを可能としたことも忘れてはならない。彼が寄せた記事「根本史料と郷土史」(第二六号、昭和二十七年四月)には、「私がギリシア史料で長い間学んできた通り、各史料の一つ一つに就いて、叮嚀に内容を分析し、中央、地方との関連を見、年代論、史料的価値を吟味することによつて、一読して気付かなかつた新しい事実を発見する」という一文がある。厳密な実証主義である。その結果、「東京で大きく評価す」「確実な史料の採録と研究団体と村との密接なチームワークとが史料編纂所で激賞」(第一八号、昭和二十六年十一月)されることとなつたのも理解できる。さらに北摂郷土史学運動の影響下に昭和二十六年一月に結成された池田郷土史学は、その目的に『池田市史』の刊行を挙げ、昭和三〇

(一九五五)年に概説篇の刊行を見ているが、凡例に「北摂連合史学会会長栗野頼之祐」と魚澄惣五郎博士の直接、指導を受けたと記している。北摂郷土史学運動は、いまも各所で続いている自治体史編纂も生み出していたのである。

『北摂郷土史学新聞』は、その後、第三八号(昭和二十八年四月)まで継続し、そこで終刊を迎えたと思われる。おそらく栗野自身の一関西学院大学西洋史学専攻教授としての一多忙が理由ではないかと、「年譜」を見て判断される。

だがその間、『新聞』には、重要資料の相次ぐ発見の記事が多数、載せられている。たとえば、改題された第一〇号には「大江丸の屏風岩図巻」発見、第一五号には能勢家文書の発見と木食仏の発見、第二〇号には山田屋大助の騒動史料の発見などが報じられている。とくに木食仏の発見は、北摂郷土史学運動最大の成果と言つていいであろうが、その熱い思いは、最晩年の昭和四二年(一九六七)に上梓された『北摂における木食上人』に記されている。

おわりに

私事で恐縮だが、わたしは昭和四二(一九六七)年に入学した大阪大学の史学科で学び、その後、関西大学史学科に職を得たので、『北摂郷土史学新聞』の記事は、わたしの歴史研究者

の歩みと大きく交差する。『北摂郷土史学報』にいう「近郊諸大学に於ける斯学の権威者たち」とは、わたしたちが教えを受けた戦後歴史学第一世代の先生方である。とくに津田秀夫氏（二九一八〜九二）の名前を見つけた時には、その場で歓声を発した。

「大阪歴史学会創立と『ヒストリア』発刊のころ」と題する座談会の中で福島雅蔵（一九二一〜二〇一一）氏と山口之夫氏（一九一九〜二〇〇四）は、古代史から近世史に転向したのは、津田秀夫氏の影響が大きかったのではないかと問われ、「津田さんは大阪学芸大学の平野分校において（昭和二十七年九月、東京教育大学に異動）、杭全神社が所蔵する膨大な平野郷帳の「覚帳」と格闘していて、私も参加しました」「津田さんがほうぼうの旧家に史料を採訪されるのに誘われ、一緒にまいりまして、具体的に地元史料に接しました。そこで、こういうふうな地域史料を掘り起こして、近世史をやっていきませんか」と悟りました」と答えている（『ヒストリア』一五〇号、一九九六）が、それはまさしく、北摂郷土史学運動の精神と実績でもあった。栗野自身の言葉によれば「過去の日本史観の是正と共に、自己の立っている社会をより深く知るための郷土史研究の必要である」（『郷土史教育を強化せよ』『宝塚新報』第二号、昭和二五年五月）となる。

その後、戦後歴史学の進展の結果、郷土史は地域史と言い換

えられ、さらに阪神淡路大震災後の歴史資料保全活動を契機として「地域歴史遺産」という概念を生み出しているが、「自己の立っている社会をより深く知る」との思いは通底している。

付記

本稿はもともと、文化庁の補助を受け、平成二六年度から四カ年の計画で始まった「川辺郡猪名川町における多田院御家人に関する調査研究」の最終年度の成果報告書用に執筆されたものである（発行は、猪名川町歴史文化遺産活性化実行委員会）。当該調査は、初年度に槻並・田中家、二年度に上阿古谷・仁部家、三年度に島・平尾家を対象に行い、各年度末には、それぞれ報告書が発行されている。平尾家の報告書には、平尾家から猪名川町教育委員会に寄贈された『復刻宝塚新報・北摂郷土史学新聞』が別冊として付けられ、第一号から第三八号（第二号のみ欠）が画像として収められている。本稿は、それを利用して、同時に収められた槻並・田中家所蔵の『六瀬村年代記』（栗野編、一九四九年正月）も貴重な史料である。第四年度には、調査成果を総合する形で報告書が論文集の形で編纂され、本稿の元になるものを寄稿した。しかし報告書は限定された部数であり、ひろく読者の目に留まるものではないことを考慮し、寄稿用にあらかじめ執筆した。

本稿を成すにあたっては猪名川町教育委員会青木美香さん、並びに兵庫県立歴史博物館学芸員前田徹氏にお世話になった。記して謝意を表したい。

表 栗野頼之祐略年譜

西暦	元号	年齢	事	社会の背景
一九七〇	昭和四五	一	十一月三日、兵庫県川辺郡六瀬村島にて、父平尾政次郎（三四歳）、母かね（三二歳）の三男として生まれ、のち母方の親戚栗野家の養子となる	アネキ五輪（第一回）
一九〇三	明治三六	八	猪名川町六瀬第二小学校（現大島小）に入学	日露戦争（明三七）
一九一六	大正五	二二	三月、大阪府立北野中学校を卒業	第一次世界大戦（大二三）
一九二〇	大正九	二五	五月、父政太郎が死去（享年五四歳）	米騒動（大五）
一九二五	大正一四	三〇	渡米	関東大震災（大二二）
一九二七	昭和二	三二	オハイオ州オハイオウエスレシア大学史学科卒業	世界恐慌（昭四）
一九三〇	昭和五	三五	チェアラー・オブ・アーツの学位を取得	昭和恐慌（昭五）
一九三三	昭和八	三八	ケンブリッジ市ハーバート大学ウイリアム・スコックン・オブ・アーツの学位を取得	満州事変（昭六）
一九三九	昭和一四	四四	アメリカのボストン美術館東洋部に勤務	五・一五事件（昭七）
一九四〇	昭和一五	四五	十月、時局により帰国する	上海事変（昭七）
一九四一	昭和一六	四六	神戸女学院専門学校大校部講師となる	盧溝橋事件（昭一一）
一九四八	昭和二三	五三	日本西洋史学会評議員となる	太平洋戦争（昭一六）
一九四九	昭和二四	五四	『六瀬年代録』を発表	終戦（昭二〇）
一九五〇	昭和二五	五五	『宝塚新報』を發行	日本国憲法施行（昭和二二）
一九五一	昭和二六	五六	一月、『宝塚新報』を『北摂郷土史学新聞』と改称（昭和二八年まで）	地方史協議会創立（昭和二五）
一九五三	昭和二八	五八	猪名川町立大島小学校（母校）校歌作詞発表	猪名川町誕生（昭和三〇）
一九五五	昭和三〇	六〇	文学博士の学位を受ける	東京五輪開催（昭和三三）
一九五六	昭和三一	六一	日本西洋古典学会委員となる	大阪万博開催（昭和三九）
一九六六	昭和四一	七一	勲三等に叙し旭日中綬章を賜る	大阪万博開催（昭和三九）
一九六七	昭和四二	七二	関西学院大学文学部教授を定年退職	大阪万博開催（昭和三九）
一九七〇	昭和四五	七五	『北摂における木食上人』を發行	大阪万博開催（昭和三九）
一九七〇	昭和四五	七五	八月三日逝去、関西学院大学礼拝堂にて告別式	大阪万博開催（昭和三九）